スケールを覚えるコツを掴み完璧にマスターする講座
スリーノート・パー・ストリング編 vol.06

さて、前回から「特定の指使いとインターバルを一致させる」ということを始めましたね。

今は、アイオニアンスケール(メジャースケール)の代表的なポジションを学んでいるので、まずは M3rd から見てみました。

そもそも、楽曲の中で出てくるコードは、(その曲の key に)対応するスケールの構成音から音を抜き出して成り立っています。

なので、スケールとコードの関係性をちゃんと理解するには、スケールの構成音の中から「コードに使う音はどれなのか？」を知っている必要がありますよね。

ということで今回は、

『(多くの場合)基本となる頻出コードの重要な構成音である、1、3、5、7 度』

の内、残りの 5 度と 7 度について見ていきましょう。

■5 度の位置、パワーコードとの重なり

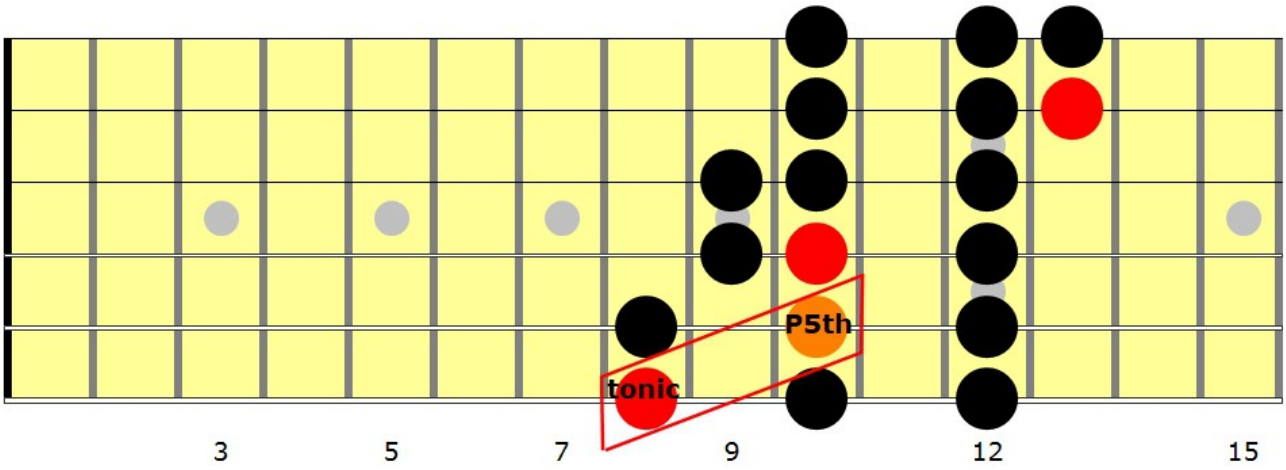
さて、ギターを弾き始めると、ほとんどの人は早い段階で「パワーコード」のことを知るかと思います。

その時、解説として出てくるであろうものが、「メジャー or マイナートライアドから 3 度を抜いた、1 度+5 度の音で出来たコード」と言ったところでしょうか。

そして、パワーコードの構成はまさにその通りになっているので、手で押さえている形を見たらそのまま 5 度の位置がわかることになりますね。(※もちろん 1 度(tonic)の位置もわかる)

図、6 弦トニック、パワーコード C の基本ヴォイシング

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved



これで単純に、指板上のどの場所でも「tonic(P1st)の位置がわかれば、ここに5度(P5th)がある」ということが導き出せますね。

この図では6弦のトニックに対してのみ5度の位置を見ていますが、どの弦にトニックを見ても同じ位置関係になります。

(※3弦にトニックを見た時だけ、チューニングの関係上1フレット広がりますが、これについては後ほど)

5度の音に限らず、全ての音に対して、その把握の仕方は色々なパターンが出せますが、まずはこの辺りの見方が一番わかりやすいでしょう。

■7度の位置、基本指使い①との一致

では、ここまで、1度(tonic)、3度(今のところM3rdのみ)、5度(P5th)と確認して来たので、最後の7度について見ていきましょう。

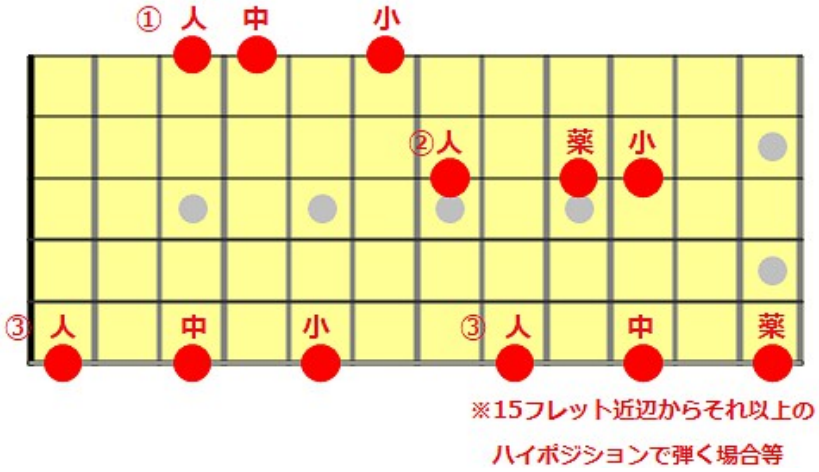
基本的には、7度として使う音は、M7th(長7度)、m7th(♭7th、短7度)の2種類があります。

今はアイオニアンスケール(メジャースケール)を学んでいますので、7度として出てくるのはM7th(長7度)の方ですね。(※どのスケールにどちらの7度が含まれているのか？については後ほど)

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

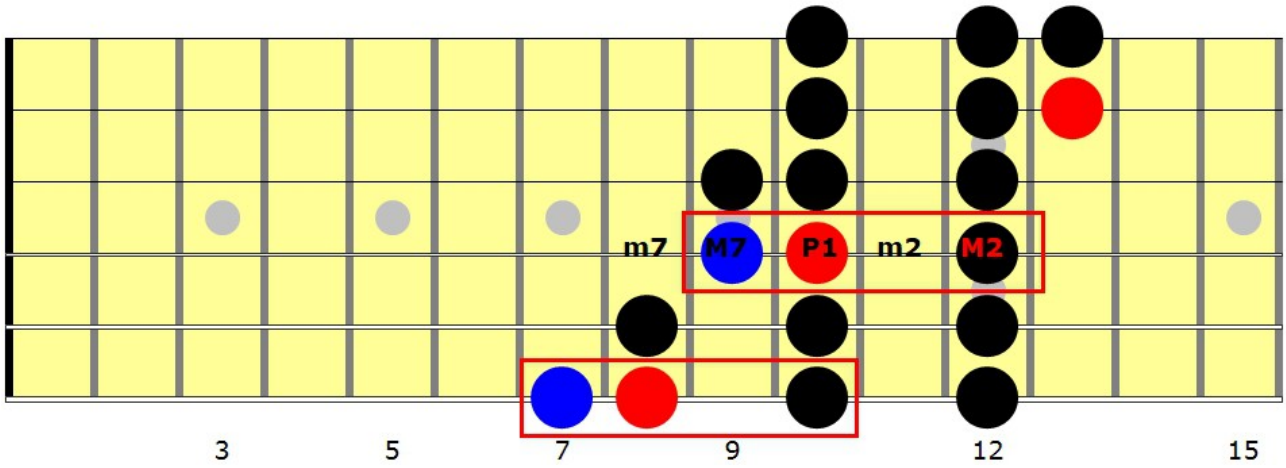
インターバルは、数字の順番通り、12345678(1)〜、と数えていくので、視覚的な位置関係から言うと「1 度(トニック)の 1 つ前に 7 度がある」とも言えます。

なので、基本指使い図の①のとき、中指にトニックを置いた場合、人差し指で弾く音が M7th になりますね。



例えば、今弾いているポジションで言うと、4 弦にトニックを見たここがわかりやすいですよね。

図、アイオニアンスケール、4 弦トニック周辺のインターバル一覧



※6 弦トニックの方でも同じような位置関係が見れます

一応、m7th や m2nd の場所も載せていますが、今はそれらも暗記するのではなく、参考程度に見ておく位で十分です。(※もちろん覚えてしまっても構いません)

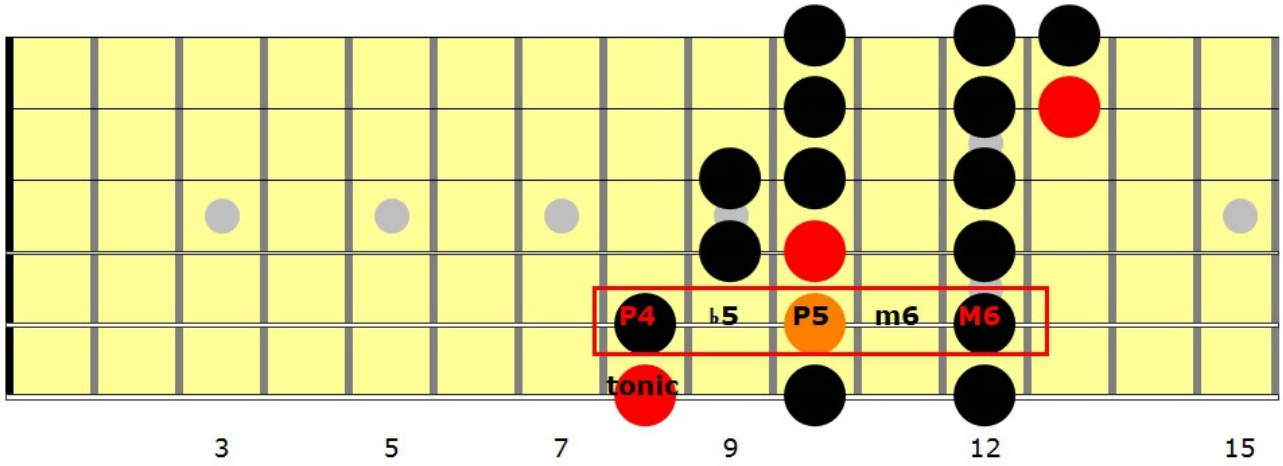
Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

さて、これで前回の内容と合わせて、6 弦のトニックから 1 オクターブ内の範囲で
1、3、5、7 度の位置がわかりましたね。

後は、この 4 つの音の間や隣りに、残りの音である 2、4、6 度の 3 音があるので、意識をしておけばそちらも自然と見ることが出来る様になります。

今回のポジションで言えば、6 弦にトニックを見て、それを人差し指で弾く場合、前述のパワーコードのヴォイシングの位置に 5 度がありますよね。

なので、その 5 度の左右の音は 4 度と 6 度になるわけですね。(※今はアイオニアン(メジャー)スケールを弾いているのでこの場合出てくるのは P4th と M6th)



前回書いたように、インターバルを覚える時は、1 度の音から順番に数えていくのもありなのですが、こうして特定の指使いなどと合わせて、パターンとして覚えていくと、理解のしやすさだったり、記憶への定着が速くなりますね。

ということで、今回は以上です。

今のところ、6 弦のトニックからほぼ 1 オクターブ内の範囲(4 弦のトニック周辺まで)を例にしていますが、その先も出てくる音は同じなので、それぞれの音の配置とその規則性を自分なりに分析してみて、スケール把握のガイドにしてみましょう。

後は、このテキストで紹介している方法以外にも、他で配布している教材の解説や練習法などとも組み合わせて、日々、色々な方法で色々な視点から弾いてみてください。

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

では、また次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved